

ジ ア ス
GIAHS（世界農業遺産）ってなあに・・・

ジアスってなあに？ 世界農業遺産ってなあに？

佐渡の人ならば、ことばはどこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。しかし、内容についてはよく解らない人のほうが多いと思います。また、このことが、佐渡の農村の歴史や暮らしに大きく関わり、現在も残っている鬼太鼓などのお祭りや、佐渡が最後のトキの生息地だったことに大きく関わっていたことなど、私達の知らなかったことが沢山あるのです。もちろん、学校では教えてもらえなかった内容ですし、このことを書いた本も無いのですから無理もないでしょう。

それでは、これから私達が1つずつ、からみあった歴史の糸をほどいて行きましょう。



正式には Globally（世界的に） Important（重要な） Agricultural（農業の） Heritage（遺産） Systems（システム）といい、頭文字を取って「GIAHS」と名付けられました。国際連合食糧農業機関（FAO）が 2002 年に初めて創設しました。「伝統的な農業や文化」を守ること、「土地景観の保全と持続的な利用」を図ることを目的としています。2013 年までに 11 カ国・25 サイトが認定を受けています。それらの地域のほとんどは、田舎や貧しい地域の農業の形を保存しようというものですが、佐渡の場合は「トキと共生する佐渡の里山」という、これからの農業の形を問うものです。



佐渡には不思議な事がいくつもあります。
佐渡にはなぜ能舞台がたくさんあるのでしょうか。

こんな小さな島に「能」に代表される芸能や、農業にかかわる神事が数多く残されています。中でも、能舞台の数は 36 舞台も残っています。なぜなのでしょう。



そのルーツは 17 世紀初頭に発見された金銀山にありました。江戸幕府は 300 年間という長きにわたって金銀山を掘り続け、国の財政を支えてきました。このゴールドラッシュにより全国各地から 300 年のあいだ人々が押し寄せ、島の人口は爆発的に増加しました。その数は金銀山がある相川地域だけで 5 万人も住んでいたそうです。現在の佐渡全体の人口が約 6 万人ですから、当時はこの佐渡に想像できないくらい多くの人たちが住んでいたことが伺えます。このことは当然、300 年間、島に住む農民たちの生活にも大きく影響を及ぼすことになりました。



食糧確保のために次々と水田が作られ、海沿いや山奥にも棚田を作りました。食料となる米や農産物はもちろんのこと、暮らしに必要な、たきぎ、炭やわら製品、竹細工など、お金に換えられる商品の需要も多かったことが伺えます。このことから、当時の農家は小規模のわりには極めて豊かな生活を送ることができたのではないのでしょうか。そして、佐渡には当時の日本でも類のないくらいの「貨幣社会」、「消費社会」が存在したと思われま



金銀山がもたらす「豊かな農業生活」が農村を支え、豊かになった農民は「ゆとり」を手に入れました。そして様々な文化や芸能を取り入れていくこととなりました。農民にとって豊作は、豊かな生活をもたらしてくれることであり、豊作がこれからも長く続くようにと神様に願ったのでした。「能」は、農民が神社への奉納神事として楽しみ、村々に能舞台が建てられたのです。今でも春から秋にかけて、多くの住民や観光客が野外で上演を楽しんでいます。鬼太鼓などの伝統芸能も、集落を単位とした豊作を願う神事として継承され、日本のどこにもない独特な農村文化ができあがったと考えられています。



佐渡のトキはなぜ、最後まで生息できたのでしょうか。

日本で初めてトキという名前が登場したのは奈良時代です。日本書紀に桃花鳥として登場し、「ツキ」、「トキトリ」と読みがながふられています。平安時代には刀の柄の飾りとして使われ、鎌倉時代には弓の矢羽に使われていました。また当時の食料の記録にもトキの名前が出ています。八代将軍吉宗の時代に、各地の大名から集められた産物帳の記録から、トキが全国に広く分布していたことが分かっています。



明治時代に入り、狩猟が庶民に解禁されると、狩猟人口が増えるのと引き換えにトキの数は減少していきます。明治41年に保護鳥に加えられましたが、大正時代に入っても狩猟は続き、個体数はさらに減少し、一時、絶滅したと考えられていました。

1930年（昭和5年）に佐渡ヶ島でトキが再発見され、その後、1960年には国際保護鳥に指定されました。そして、2003年、キンと名付けられた国内最後の野生トキが死亡し、ついに日本で生まれたトキは1羽もいなくなってしまったのです。

さて、お話を最初にもどしましょう。なぜ、佐渡がトキの最後の生息地だったのでしょうか。

江戸時代も終わり、明治時代に入ると金山はしだいに衰退し、農業収入も減少することとなります。しかし、島であることもあり、他にこれといった産業のない佐渡では農地は大切に残されました。

高度経済成長を経験し、大規模農業の時代になっても山間の農地は規模が小さため耕地整理をすることができず今に至っています。効率的な土地改良が進まなかったことが、かえって今では土側溝やため池などを残すこととなり、多くの生き物が生息できる環境をそのまま残すこととなりました。また、農薬の使用も控えたことで、豊かな生物多様性が守られ、トキが日本において最後まで生息できる環境が維持されてきたのです。

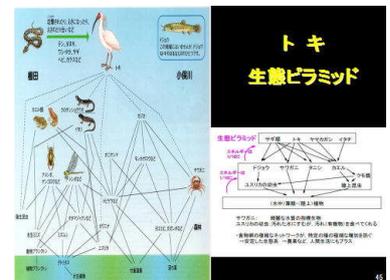


トキは、その後の研究で、中国のトキと遺伝的に同じ種の一つの群れであることがわかり、改めて中国のトキを借りて人工増殖し、野生復帰を目指すこととなりました。1999年、中国から譲り受けたつがいに初めてヒナが誕生。放鳥されたトキの生存数は2013年時点で98羽です。

トキと共生するにはどうしたらよいのでしょうか。

放鳥されたトキと共に暮らして行くには課題がいくつもあります。トキが生き続けられる自然条件を整えることです。過去に生き続けていた本来の生態系を復元することです。

具体的には、トキを守るために、餌となるドジョウやタニシ、カエルを守らなくてはなりません。そのドジョウを守るためには餌となるユスリカという蚊の幼虫やソウ類や植物類を守り、動物性・植物性プランクトンを守るといのように、トキを頂点とする生態系全てを守らなくてはなりません。いわゆる生物多様性を保全・再生する必要があるのです。



有機農法で酒米やトキ認証米を作り、冬は酒造会社でお酒を造っておられる佐々木さんが、生態系の重要性を教えてくださいました。

- ・トキがエサにしているカエルやドジョウのほとんどは、田んぼのアゼぎわを住みかにしている。
- ・アゼ草は除草剤を使わず、草刈り機を使って生き物たちが暮らせる環境を作ってあげることが大切。
- ・人間が田んぼを作らなくなったら、虫もいなくなり、トキも住めない島になってしまう。
- ・お米を作ることは、人間の食料も作るけれど、沢山の生き物と環境を守る役割もしているのです。



私達も参加した生き物調査では、有機無農薬米を作っておられる林さんの水田の江で、数多くの虫を確認することができました。

環境に配慮した農業を紹介しましょう。

佐渡市では、これらの生物が生きられるように農薬の成分を慣行栽培の半分に減らした栽培方法や、多くの微生物が育つようにと化学肥料成分を半分に減らし、有機質で補う栽培方法が行われています。このほかにも、

(1) 江（深み）の設置

田んぼが乾いたときに、生き物が避難できる場所を確保します。



(2) 魚道の設置

水田を魚の産卵場所や生育場所にするために、小川と水田を人工の魚道で繋いでいます。メダカは水田で産卵し、川に帰っていきます。

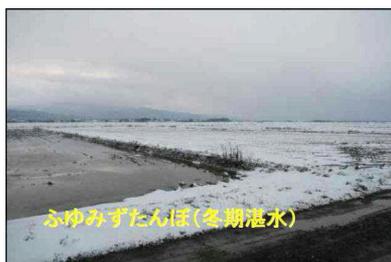


(3) ふゆみずたんぼ（冬期湛水）

冬期間の生き物の越冬場所や、早春のヤマアカガエルなどの産卵場所として、冬の間も水を張っておきます。

(4) ビオトープの設置

休耕田を利用し、1年をとおして水をため、生き物の生育場所を確保しています。



このように「生き物を育む農法」で作られたお米は特別なお米としてブランド化され、付加価値を付けて販売できることから、生産者にとっても農業収入が増え、棚田などの比較的小規模な水田の維持が可能になると考えられています。



加茂湖のカキ殻を使い、有機質の質にこだわった米作りをしておられる相田さんが私達に教えて下さいました。「微生物を増やし、生き物を増やし、トキを守ることができる稲作技術こそが、人を守ることに繋がり、地域や集落を守ることに繋がるのだよ。」という貴重なお話を聞くことができました。



- ・手つかずの自然環境の中では、トキは生きていけないのではないのでしょうか。
- ・人が田んぼを作り、アゼ草を除草剤を使わず機械で刈ることで、生き物が生まれて来るのです。
- ・古い時代から、トキと人間は、寄り添って生きてきたのではないのでしょうか。



- ・農家と、生き物と、環境を守る取り組みが必要なのではないのでしょうか。
 - ・私達が、その地域で作られたお米を食べることこそが、日本のトキを守ることに繋がっていくのではないのでしょうか。
 - ・トキが安心して暮らせる環境こそが、私たち人間にとっても安全で安心な環境となり、共生することが私たちに本当の豊かさをもたらしてくれるのではないのでしょうか。
- これが、私達の感想です。



佐渡での生活に惚れこみ、移住して来た東京生まれの新田さんは、佐渡の魅力について語って下さいました。世界中のいろんな国で生活をし、日本に帰ってきたとき、東京が灰色に見えたそうです。みんなが何も会話をせず、スマホばかりしていたそうです。

佐渡には、島だからこそ残された物が沢山あると言います。青々とした緑。人と人との付き合いが残っていることだそうです。棚田があったから皆で仕事をする。コミュニケーションが生まれ、集落ができ、人と人をつないでくれる芸能が生まれる。その芸能を皆でつないで行こうとして地域が作られる。その集落ごとに違う芸能を自慢げに話せることが佐渡のすごさだと言います。

また、新田さんは、人が飲める湧き水でお米を作っているそうです。小さなお米だけれど山の全てが凝縮されているように感じ、とてもおいしいとのこと。人がちょっと手を掛けただけでお米ができ、山をわたる心地よい風は、生活の中にひといき付ける時間を与えてくれる。それが佐渡の魅力だと言います。



トキと共生する佐渡の里山とは・・・

金銀山がもたらす経済効果が農村生活にゆとりを与え、先人たちは様々な文化を取り入れ、心豊かに暮らしていたことでしょう。また、各農村集落に伝わる鬼太鼓などの伝統芸能や神事は集落の結束を高め、共同作業等により農地や農業を守ってきたのです。その農地は現在でも豊富な生物多様性を保ち、私たちに安全で安心な環境や食糧を育んでくれています。そのような自然と大地、文化が一体となって織りなす佐渡だからこそ、トキと共生できる唯一の住み家といえるのではないのでしょうか。



私達にできることってなあに？

直接トキの保護活動に関わることはすぐにはできません。しかし、トキと一緒に住める島にするために、まずは、1個の空き缶を拾うこと。住んでいる地域のお米を食べること。小さな1歩から始めてみませんか？



資料・写真提供：佐渡市農林水産課 生物多様性推進室
写真提供：環境省
：山田裕之 氏
：新田聡子 氏